

# 「五四」前後の大連における傅立魚の思想と言語

——1919年ごろの日本植民地に生きた中国知識人を観察するということ——

橋本雄一

1「関東州」というメディア空間／2日本植民地への亡命者として／3五四運動期前後の傅立魚の思想 日本側への対抗者として／4傅立魚の言語の特徴とその「歴史」性 植民地と言語様式／5言論人として、活動家として／6植民地がもつ「縦」と「横」を植民地批判の視点に

## 1 「関東州」というメディア空間

日露戦争をへて、遼東半島を「関東州」として租借した日本は、その地を中国大陸東北部への足がかりとしていく。その十年前には日清戦争によって領有することになった台湾がある。それにつぐ早さで設置された外地政策の拠点だった。その後、近代日本植民地の統治・軍事・経済を所管する空間の一つとなっただけでなく、日本人による生活・商業の空間として、また帝国日本の「内地」からの植民地旅行の玄関として、この「関東州」とくに大連は役割を四十年にわたって果たすことになる。

文化知識人の往来も盛んとなり、植民地領有戦争の「記憶」と植民地経営の「現在」をたどる視察旅行が夏目漱石（彼の旅行と紀行文「満韓ところどころ」はともに1909年）らから始まり、文学作家＋文学テキストという文化的身体を帝国←→植民地をめぐる拡張させる回廊の入り口ともなる大連だった。1920年代に入ると治安維持法下の帝国日本との関係も生まれる。これらは「満洲国」にまで見られるいわゆる日本人「転向」作家の移入としても、また成立した中国共産党が派遣する地下活動家といった中国側の動き、またそれを取り締まろうとする日本側「関東庁」の動きとして見てとれよう。

植民地特有の文化メディアも花開いていくこととなり、日露戦争直後から活字メディアとしては日本語新聞、日本人による中国語新聞が創刊され、やはり20年代には音声メディアであるラジオ局が「帝都」東京に開設されるや、ただちにこの大連にも設置され、帝国と植民地が日本人の声でつながるようになってしまった<sup>1)</sup>。

そうした日本側の植民地政策と文化メディア活動に対して、中華民国本国の「五四」期にあたる時期の大連中国知識人が明確に自分たちの立場を表明し始める言論活動の一端を、小論では整理したい。

## 2 日本植民地への亡命者として 傅立魚

五四期の「関東州」大連で1920年7月に創立された、中国人による東北で最初の啓蒙進歩団体

「大連中華青年会」。その発起人となったのが、傅立魚（1882 - 1945年）である<sup>2)</sup>。もっとも、傅立魚と大連の関係はその前から始まっている。1913年、日本人経営の中国語新聞『泰東日報』に招かれた彼は編集長として、植民地を運営する日本側への対抗言説や中華民国についての分析論、国際情勢論などの社説を展開していくのだ。

17歳で科挙「秀才」の資格を取った傅立魚は安徽大学堂に学び、清末の官費留学生として1900年ごろから日本の明治大学で法律と政治を学んでいる。こうした前近代と近代とをつなぐ彼の経歴はその世代に共通しており、とくに日本留学という異国体験とその時期は、魯迅（留学時期は1902 - 09年）のそれと重なっている。

東京で孫文の革命同盟会に加入するなど、日本に亡命してきた多くの革命家や進歩的知識人と交流した傅立魚は中華民国成立後、南京で外交部参事に任命される。その後、天津で自ら創刊した新聞『新春秋報』上で折からの袁世凱による帝政運動を批判したため、自国政府から追われることに。新聞人としての亡命の「魚」が渤海を渡って、たどり着いた先が遼東半島の大連だった。1913年8月のことである。ここから彼と日本植民地の関係が始まる。

この亡命の軌跡には、自国のアナクロな暴力によって生命の危機に立たされた中国近代知識人が、海の先の日本近代植民地を避難場所とするような地図が観察できる。これは、帝国日本の首都、東京に集った上の世代の革命知識人たち、すなわち孫文、章炳麟、黄興らの体験との新たな相似形として確認できる。日本が植民地帝国として膨張し始めるにつれて、大げさに言うなら、東アジア近隣の文化と人にとって、交通地図は帝国植民地をも照準し始めたということではないだろうか。

「関東州」の中国語新聞『泰東日報』に新たな言論活動の場を見いだした傅立魚だが、編集長就任前にあったのは、日本租借地のこの新聞社は日本人が主宰するため、中国人としての自由な立論が困難だろうという懸念だった。そこで彼は『泰東日報』社の日本人社長、金子雪斎（—1925年。傅立魚を見初め、互いに尊敬しあったという新聞人）に次の三点を約束させたという：

- 一、『泰東日報』は中国語新聞であり、読者は中国人である。よって中国人の立場から立論する。
- 二、中日の両国あるいは民間が衝突した場合は、是非を曲げることなく、真理正義に服して双方を平等に扱う。
- 三、袁世凱を討つチャンスが来たら、すぐに編集長の任から離れ自由の身となる<sup>3)</sup>。

ここからは二つのことがうかがえる。一つは、植民地「関東州」の、中国人言論に対するいまだソフトな初期的関わり方である。論者の浅見によれば、これはいまだ無風地帯としての植民地空間に生み出された象徴的な文化現象の一つと言える。こののち1919年の朝鮮の三一独立運動の勃興と、それを横目に見て警戒する「関東州」の日本租借地政府「関東都督府」（その警戒は同年4月「関東庁」への再編制として結実）による自身内部の異民族・異言語にたいする統制の強化（「関東軍」の創設もその一例だろう）、1925年の帝国日本の治安維持法成立、1928年の帝国「内地」における共産党地下組織の一斉摘発（三・一五事件）、それに連動するかなような大連での中国活動家の摘発、と強まる植民統治メソッドの一連の波を想起したい。このように植民地経営を「学習」していくその前の「関東州」の時間と空間に傅立魚は上陸した。

もう一つは、傅立魚自身の近代中国人（中華民国「国民」）としての対外独立意識、さらには中華民国への貢献を終始目的とする進歩知識人の顔である。実際の行動にもそれはうかがえる。金州郊外

の中国農民が自分たちの土地を日本企業に強制買収されようとするのを、『泰東日報』上に告発して日本側の動きを阻止。また、中国共産党が派遣した地下活動家と大連中華青年会内部において連携しながら、日本人経営の工場における中国人労働者の運動を擁護する。

中華民国への幅広い眼線としては、新しき中国東北人＝中華民国「国民」＝近代中国人、の設定と呼びかけが、彼の言論活動に観察できる。『泰東日報』上の膨大な社説や、彼が中心となって1923年に創刊する中華青年会の機関誌『新文化』（のち『青年翼』と改題）の上に展開されていく新文学のコーナーなどがその一例である。傅は中国東北において最初の近代文学のオルガナイザーでもあった。次節では『泰東日報』に掲載された彼自身の社説を紹介したい。

### 3 五四運動期前後の傅立魚の思想 日本側への対抗者として

#### 3-1 言説の分類

今回取り上げるのは、五四期前後の1919年3月から8月初めまでに傅立魚が執筆掲載した『泰東日報』社説である<sup>4)</sup>。次節に一覧するが、それらは内容によって以下のように分類できる。

##### (1) 「関東州」・日本への対抗言説

【中東鉄道（＝東清鉄道）、旅順・大連・金州の中国側経済、大連中国人の教育、「支那」という日本側の呼称、「関東庁」の体制……】

植民地「関東州」の日本人の各種権益に比して、中国人が不当に扱われている事実の告発が展開される。1918年12月には、「金州と旅順の繁栄策 都督府に大連居住問題の救済を願う」と「関東都督府」を名指しして要求を展開、中国史において遼東半島の伝統的中心地だった金州の繁栄策を打ち出している。また1919年6月「大連の土地家屋問題について—中日間の差別は不可一」は、土地の権利にかんする日本側による中国側への差別を追及するタイトルと内容であり、その対日本にかかわる強度は記念されるべきである。ただし、中国社会にたいする「関東庁」の「善政」を「感謝」する内容の社説もある。

##### (2) 中華民国の「国民」として

【梅蘭芳訪日記事、中華民国の南北政府対立と内戦、列強の対中国政策……】

ここでは、孫文の広東軍事政府と北京の軍閥政府という南北対立からの内乱を憂い、国内統一を切望する内容が目立つ。こうして社説の読者を中華民国の「国民」として本国情勢を扱い、読者が生きる「関東州」という空間をあくまで中華民国の地図上に配置する傅立魚の姿勢は一貫している。

##### (3) 国際問題・ヨーロッパ事情（第一次大戦後の）

【ドイツ帝国の末路、第一次大戦がもたらした問題、「民族自決」の潮流……】

五四運動の発端も大戦後のパリ講和会議だった。遼東半島の中国人にとってより切実だったのは、かつて袁世凱が受け入れた「二十一ヶ条の要求」をめぐってパリ講和会議が追認した日本の対中国権益のなかに、「関東州」の延長利権が明記されていたことである。「関東州」にいる中国知識人にとって、第一次大戦がもたらす運命はすぐに自分たち自身のことでもあった。五四運動を直接扱い、

運動の担い手たちにたいして冷静で有効な手段をと述べる社説（1919年6月1、18日付）もあるが、傅立魚の社説にはパリ会議と連動したヨーロッパ事情を扱ったものが多い。

#### (4) 人類の科学問題

【労働と人間の身体、肉食の害……】

「近代国民」のための科学知識を喚起する内容である。これについては後述する。

### 3-2 この時期の傅立魚の社説一覧

#### (1) 「関東州」・日本への対抗言説

掲載年月日	タイトル（日本語に訳す）	内 容
19190306	東北三省の金融界の暗淡	東北の中国側経済の不安定
19190312	中東鉄道が中国に帰すべき理由	中東鉄道（東清鉄道）は中国の権利
19190313	日本は中国に対する支那の呼称を改めよ	日本側への批判
19190314	中国にたいする日本の具体的な親善方針について	日本の大陸政策について
19190316	大連の中国人教育問題にたいする要望 一	既成の公学堂の改良を
19190318	大連の中国人教育問題にたいする要望 二	公学堂の増設、拡充を
19190319	大連の中国人教育問題にたいする要望 三	華人教育と中日外交
19190320	大連の中国人教育問題にたいする要望 四	華人教育と商業発展
19190321	大連の中国人教育問題にたいする要望 五	教育方針と教員任用（日本人多し、中国人少なし）
19190328	関東州官制の改正	日本側の改変（「都督府」が「庁」に）について
19190329	林権助が関東庁長官に就任することとなった	新制「関東庁」の問題点
19190412	満鉄の船賃改正の必要を論ず	満鉄の貨物輸送と苦悩する中国人商業界
19190416	満鉄首脳の変更	満鉄の事情
19190417	日本当局の禁制品にたいする取り締まりに感謝す	日本側への要望と感謝
19190418	土地建物会社への要望	大連中国人の居住問題と日本側への要望
19190427	市役所の新庁舎への移転を祝す	日本側事情
19190601	日本商品を排斥することの利害を論ず	五四運動事情 中国政府にたいする冷静で有効な方法を
19190612	林関東長官の善政	日本側への評価 アヘン取り締まり強化と司法制度の改革
19190619	大連の土地家屋問題について—中日間の差別は不可—	日本側への批判
19190627	駐日公使之人選について	日本側事情

#### (2) 中華民国の「国民」として

19190326	梅蘭芳の訪日演芸活動について感ずること	中日の文化交流
19190327	建設の力	中華民国の実業・教育・軍力を立て直す自覚を
19190403	瓜田李下	外モンゴルへの干渉をやめよ
19190405	南北和議について	中華民国の内乱
19190410	真の愛国者と偽の愛国者	中華民国の南北分裂と「愛国」
19190430	ウラジオストックの『中華商報』出版を祝す	極東の外交と商務の重要地における華僑
19190605	新借款団を論ず	英米仏伊日の五大国の対中国借款
19190607	チベット問題	イギリスのチベットをめぐる要求について
19190614	北京政府の総辞職	中華民国の政治体制
19190618	過激派は亡国の種なり	中華民国の社会変革は法律に則るべし
19190620	後継内閣について	南北問題と財政問題を解決できる中立内閣を
19190622	東北の悪情勢—張孟のつばぜり合いがまた始まった—	東北軍閥事情（張作霖と孟恩遠）
19190628	奉天—吉林の危機、収まるか	東北政治情勢（同上）
19190801	国民性の修養	中華民国「国民」として

#### (3) 国際問題・ヨーロッパ事情（第一次大戦後の）

19190308	西園寺侯のパリ講和会議における人種差別撤廃案	日本が主張する案について
19190411	対ロシア政策について	対ソ連の問題

19190419	ヴィルヘルム二世の処分問題	第一次大戦後のドイツ
19190423	セルビアの共和制宣言と世界情勢の関係	第一次大戦後の国際情勢
19190424	フランスとドイツの紛糾と「薩爾流域」案	第一次大戦後の独仏
19190606	オムスク政府の承認問題	ロシアの共産化と中央アジアの問題
19190613	オーストリアの衰退と民族観念	第一次大戦後の多民族状況と「民族自決」

(4) 人類の科学問題（時期が若干ずれるものも含めた）

19181211	精神労働者と肉体労働者の調和	前者はスポーツを、後者は頭脳訓練を
19181220	肉食過度の弊害	近代人の身体の重要性 野菜を
19190625	カビの多い季節	夏の湿気過多に注意し、衛生を重んじよう

以上、多様な問題を扱っていることが分かるが、とくに「関東州」・日本への対抗言説が多い。孫文をはじめとする革命家と関係を持ち、新しく造られるべき中国を目指す傅立魚の、それを阻む者への対抗意識を証明するだろう。具体的にはそれは、中華民国の「国民」として外来植民地主義にどう対処するのか、という意識である。さらに、国際事情を扱う社説もこの点につながってくる。大戦終結後、欧米列強のあいだでさまざまな意味でキーワードとなった「弱小民族」の「民族自決」である。すなわち東アジアの遼東半島でもこの課題を実現しようという姿勢が、傅立魚に（さらにその他の社説執筆者にも）見られる。

この時期の中国大陸東北の日本植民地にあったこうした他者の言論にたいする観察は、現代日本の研究ではまだこれからである<sup>5)</sup>。論者は今後さらに『泰東日報』の傅立魚の社説を追っていく必要を強く感じる。

## 4 傅立魚の言語の特徴とその「歴史」性

### 4-1 文言でありつつ、他の執筆者よりも白話の要素濃し

創刊からこの時期までの『泰東日報』の全記事は、すべて中国伝統の書き言葉、いわゆる“文言”が用いられ、社説も例外ではない。社説の執筆者には傅立魚（署名は“西河”）のほかにも数名いるが、それらの文体を比較してみると、傅立魚の“文言”体は話し言葉（“白話”）の要素が最も豊富であり、ゆえに読みやすい。例をあげてみる（句読点は引用者が適宜、施した）。

真愛國者與假愛國者（西河）『泰東日報』1919年4月10日付 社論

愛國者至美之名詞也。然而有真假之別焉。其真與假之界限，亦惟在公私義利之間而已。不辨乎此 而聽任假愛國者橫行天下 吾恐愛國者愈多 國之危亡亦愈速 其害甚于洪水猛獸 故不可不嚴辨而痛斥之也。（後略——引用者。以下同じ）

【日訳——引用者による。以下同じ。

真の愛國者と贗の愛國者 西河

愛國とは美しきことこの上ない名詞である。しかしそこには真か贗かの区別がある。真と贗との境界とは公と私あるいは義務と利益の間にあるにほかならない。その境界を問題としないなら、贗の愛國者が世の中を横行するのに任せることになってしまい、愛國者が多ければ多いほど国家の衰亡はますます速まるのである。その害は洪水や猛獸よりもひどい。ゆえに真贗の区別を厳密にして、贗を強く非難しなくてはならない。】

論滿鐵船賃改正之必要（西河）『泰東日報』1919年4月12日付 社論

滿鐵者有開發滿蒙之使命，而又負發展大連港之天職者也。故一切行動宜鑒于遠者大者 不宜拘拘於近者 博蠅頭之微力 如一私立商店之行為也。

試就上海航路而言之，在歐戰以前，雖有西商太古、怡和、和記、等公司，與之並駕齊馳，而自歐戰發生以至今日，西商輪船 皆應徵發赴歐從事戰役。於是上海航行之權，乃為滿鐵所獨占。無論運人運貨，舍滿鐵之榭丸、神戶丸 兩船外，不能達彼岸也。（後略）

【日訳

滿鐵の船賃を改正する必要について論ず 西河

滿鐵は滿蒙を開発する使命を有し、大連港を發展させる天職を担っている。ゆえにその全ての行動は先の長い大きな目的を達するためであるべきで、眼のまえの小さなことに捕らわれているべきではない。蠅の頭にとびかかるような微力とは一個の個人営業の商店の行為なのである。

試しに上海への航路について言えば、ヨーロッパの第一次大戦以前はヨーロッパの貿易会社、太古（イギリス系のスワイヤー商会の中国語名——訳者。以下同じ）、怡和洋行（イギリス系のジャーディン・マセソン商会の中国語名）、和記企業有限公司（ハチソン・インターナショナルの中国語名）などは滿鐵と勢いは互角であったが、大戦勃発から今日まで、それらの会社の汽船はみなこの戦役に徴発されて呼び戻されてしまった。そこで上海航行の権利は滿鐵が独占するところとなり、客船であろうが貨物船であろうが、滿鐵の榭丸と神戶丸の二隻以外は、上海に行けなくなってしまった。】

對於土地建物會社之希望（西河）『泰東日報』1919年4月18日付 社論

年來大連市因人口驟增之結果，房屋告罄 中流以下之市民感於非常之苦痛。呼籲時有所聞 市政當局為救濟此種險象起見 一方面整理市外地皮 以圖擴張住宅 一方與陸軍交涉 將東公園一帶之軍用地十一萬坪開放 以便建築家屋 關於此等 已於前日由市政廳開會集議 據當事者之說明，擬創立一土地建物會社 將該項地皮完全報領。（後略）

【日訳

土地建物会社にたいする希望 西河

ここ数年、大連市の人口は急激に増えたがゆえに、居住用の部屋物件が無くなり、中流階層以下の市民は多大な苦痛を感じている。このような訴えをしばしば耳にし、市政当局はこの事態の救済のためという見地から、まずは市外の建設用地を整理して住宅の拡張を図っている。さらに、陸軍と交渉して東公園一帯の軍用地を11万坪開放させ、家屋を建築しようとしている、とのことである。これらの計画に関して、先日、市役所庁舎で会議が招集された。参加した当事者の説明によれば、臨時に土地建物会社を設立して管轄するとのことである。】

彼の日本留学よりさらに早い時期に、やはり自国の“変法自強”運動への弾圧によって日本に亡命せざるをえなくなった梁啓超や、先述した日本留学の魯迅らは、近代日本の言文一致運動のあとの日本語体験を経て、中国語の近代白話体のあり方に関心を持ち始める。傅立魚による白話の影の濃い文言体も、ほぼ彼らと同時期の日本における言語体験が出发点なのだろうか。この問題は今後さらに精査してみたい。

また、傅立魚は『新文化』、『青年翼』誌上に、頻繁に彼自身の手になる詩篇を掲載していく。し

かしそれらはすべて旧体詩なのである。小論が今回扱った時期とは異なるが、一篇のみ紹介しよう。

初春即事 傅立魚（『青年翼』第4巻第4号、1925年4月）

底事遼東春到遅 東風二月始來吹  
閑搜菜粒播南圃 為護花苗補北籬  
逐暖遊山攜榫子 抒誠禮佛學沙彌  
一年好景從今起 排遣塵緣樂不疲

### 【日記】

初春にさいして 傅立魚

なにゆえ遼東におそい春がやってきたのか 時は二月、東の風が吹き始めた  
あてもなく野菜の種を拾い南の畠にまく 花咲く前の芽を守るため北に垣を補う  
次第に暖かくなり山に遊びモクセイを摘む 仏寺で若い僧を見かけ一礼する  
一年の佳き日は今ここに始まる 世俗のしがらみを捨てて楽しみ、倦むことはない】

幼少から科学受験型の学問を体験してきた世代であるため、伝統文学の言語形式を引き継ぎながら、「遼東」、「南（に種をまく）」「北（の垣を補う）」（民国の南北分裂への対応のことも重ねて言っているのではないだろうか）といったワードが使用され、そこに表す意味において、東北と近代もしくは同時代をイメージさせる手法がうかがえる。このように言語形式と意味内容において、文化的な時間を横断するような彼の旧体詩は多い。

### 4-2 植民地と言語様式 大連における「近代」

東アジアの近代において近代文学作品が出現するには、まずは外来の近代「小説」などの影響や、適した言語（いわゆる「国語」）の成立と適用といった条件から、一定の成熟の時間が必要であった。近代日本植民地下の中国語による文学的成熟は、中国本国の中央と比べて、なおさら遅れてやって来る。中華民国の言語学者、銭玄同は1925年に東北吉林の「反国語運動」についてくり返し批判を展開している（「吉林的反国語運動」など）。

それでも、東清鉄道（中東鉄路）～満鉄というレールでつながった三大都市には、おもに1920年代から言語の新展開～「文・学」的胎動～新文学の試作という流れが観察できる。海を隔てた1920年代以降の「関東州」大連、さらに満鉄附属地という性格と中国中央との直結性という性格からの「奉天」（瀋陽）、そしてソ連情報と接しそれゆえ帝国日本の半官半民的な情報前線基地としてもあったハルビンである。このうち大連において、新聞・雑誌メディアを舞台に「言語の新展開」を進めたのが傅立魚と言える。

帝国日本の「内地」が「近代文学」という局面で言文一致を試みる嚆矢は二葉亭四迷「浮雲」（1887年）とされるが、日本植民地下の中国近代文学の胎動は、この帝国日本側からと中華民国本国側からの近代文学の動態、という二つの視点から測られる必要がある。後者の視点で言えば、早くは理論面での梁啓超「小説と政治の関係を論ず」（1902年）などに始まり、続く同時期の作品実践としても読める新聞ジャーナリスト、李宝嘉の「官場現形記」（1903年）など白話による政治娯楽小説があり、

1910年代半ばからの「国語」統一運動と文学革命、さらに五四新文化運動へと接続していく。このように、本国じたいがそのようないわば時間＝差をもっているのだから、日本植民地に巻きこまれた中国大陸周縁部はそこからさらに時間＝差を抱えはじめるのは当然である（中国のどこよりもいち早く帝国日本から日本語による「近代文学」の訪れがあったとしても）。現に、本国の文学革命をとくに白話推進の観点から詳細に解説した「文学革命漫談」（署名は芮慕城）が、『泰東日報』上で六回にわたって連載されるのは、1920年7月6日から11日のことである。

問題をあらためて取りもどすなら、中国本国の文化現象と比べてつねに時間＝差を持たざるを得ない周縁たる日本植民地における言語の様式を、なぜ見る必要があるのか。それはまずは「植民地」という問題こそ、近代言語の様式にとってのエレメントだからである。近代中国の発音表記の試行から中華民国の「国語」思想・政策・運動も元を正せば、外来帝国主義による中国の植民地化という危機が発端にあったのは自明のことである。

さらに大きくは、時間の差と地理的空間の差でかたちづくられた「国語」と「文学」（それ自体が本国においてさえ如何なる時も、標準語＋白話という思想を目指す運動体そのものであったが）の伝播地図をより細密に把握するためである。胡適は「国語」と「近代文学」という近代のための理想的な二大ツールを、区別しながら同義語としても認識しているが（『建設的文学革命論』1918年）、その同時期、この二大ツールがまだ波及して来ないままにどこよりもそれを欲しつつ、植民地都市として栄えていく大連なのである。傅立魚はそのような場所で近代中国の「新文化」（彼が創刊した雑誌の名前でもある）を発見しなければならなかったし、創設しなければならなかった。

では次に、当の植民地にあっては言語の「様式」はまずどこにあるのか。それは「文学」（それはつねに或る意味で「成熟した文学」）にだけあるのではない。「文学」以前の社会的ビジュアル文の総体、いわば「文・学」において、はや既に様式の問題は始まっている。論者も含めて関連研究者は、これまで植民地文化の「成熟」期（と見えてしまうような時間と空間。具体的に言えば「満洲国」の1935、36年あたりから崩壊直前まで）をおもに扱ってきた。しかし「成熟」に至るまでの過程としての、活字メディアすべてを含めた言語空間に見られる言語様式にこそ、東北植民地の言語文化の根はあるのではないだろうか。

#### 4-3 日本語の語彙の流入

先に抄訳した社説も含め、傅立魚による多くの社説のうちには、日本語の語彙が頻繁に顔をのぞかせる。それらを大別するなら、(A) 帝国日本が大連に持ちこんだ組織・制度の名や地名をそのまま使用したもの、(B) 一般名詞としての日本語をそのまま借りたもの、となる。先にあげた社説一覧表にもうかがえるが、(A) 類は“満洲”、“満鉄”、“満蒙”、“関東庁”、“関東長官”などを始めとし、(B) 類としては“船賃”、“建物”、“会社”、“鉄道”、“阿片”、“取締”、“新庁舎”、“家屋”などなどである。

このうち、とくに (A) にかんしては、日本側にたいする主張をより有効的かつ直接的に表すため、日本側権力に分かりやすくする目的でそのまま日本語語彙を使っているのではないかと思われる（もちろんこれらは固有名詞であるか限りなく固有名詞に近いものだから、翻訳が不可能だという事情もあっただろう）。そのような主張とその背後の対抗意識の直接性が許されたのが、この時期の「関東州」だということにもなる。日本語使用のこの理由は、のちの「満洲国」下の中国人作家による言語のプラクティスとは、軌道をまったく異にするとと思われる。「満洲国」下の中国人作家のテクス



ト内には、こうした故意の日本語使用は少ないのである。植民地東北をめぐる現地人側による異言語の使用方法には、時期ごとの変遷がある。

傅立魚は1900年から遅くとも1911年以前までの期間に日本に留学していたという資料があるが<sup>6)</sup>、その帝国日本留学から1913年に始まる植民地大連の空間体験までの「日本語歴」に、彼の社説に頻出する日本語単語は由来すると見てよいだろう。となると、彼のようにその「日本語歴」が広くメディアに反映されるような事例は、その後が続いていく東北における大きな意味の中国側「日本語歴」の幕開けを意味するはずだ。いや、新聞社説という公共メディア領域のなかに通わされた日本語パッセージは社会的な浸透圧を持っているのであり、それは幕開けというよりも、その後の中国社会における日本語単語使用の基礎となっていると言ってよい。傅立魚は一つの例ではあるが、そのような起源の例をほかにも集めて見つめるなら、東北の日本語接触体験はさまざまな「来歴＝時間」がはたらいっていることを知ることができるだろう。こうした時間の流れ＝歴史性を遡及しないまま、その後の一時期の言語様相だけ追ってみても、それが扱ってきた根源を見ることにならない。

「満洲国」下にしても、ある中国人作家が使ったその単語は往々にして、中国語社会のなかでつねにすでに社会言語化された日本語語彙なのであり、それはつまり「前＝世代」(前＝時間)が接触体験して何らかの意図や無意識のうちに通わせた言語のパブリックな水路なのだ。そうであってみれば、いついかなる時も「時間＝差」を意識し、つねに「起源」の日本語体験へとさかのぼらなければ、東北植民地に行われた異言語体験の意味は把握できないことになる。

## 5 言論人として、活動家として 傅立魚における融合

批評と闘争の旺盛な力をもった「魚」として植民地「関東州」の波を闊達に泳ぎかけめぐった傅立魚。大連中華青年会の創立と活動はその最たる成果であろう。この青年会が毎週開催した講演会(青年会同人や大連居住の日本知識人、さらに文学革命と五四新文化運動の旗手であった胡適や、演劇家の歐陽予倩……)は1928年まで続き、その成果を『泰東日報』、『新文化』、『青年翼』などに反映させていく。

大連の中国青年＝中華民国を将来担うべき「国民」、を育成するため、青年会経営の小中学校を大連の中国人商業界の財力も得て、開設。すでに1918年12月11日付『泰東日報』の社説「精神労働者と肉体労働者の調和」で「精神労働者にはスポーツを、肉体労働者には頭を使う作業を奨励すべし。そのような相互の向上のために、欧米や日本で盛んな夜間学校を関東州にも多く造るべし」と主張していた。その提言の通り、青年会経営の学校には夜間部が設けられた。五四期の1919年6月25日には、カビの生えやすい夏場の台所や食器について注意を促し、衛生と健康を喚起している。

そのような「近代人に求められる健全な身体」は、傅立魚のもう一つのテーマであった。1918年12月20日付の社説では「肉食の害」を説き、『青年翼』第6巻8号(1927年8月)には青少年に水泳を奨励する論文「海辺へ行こう」を載せている。後者では、泳ぎの型の懇切丁寧な説明や、大連の利用しやすい海水浴場の詳細な案内など、力の入れようは生半可ではない。

こうした傅立魚の言論と行動の組み合わせは、日本植民地にあって大きな示唆に富んでいる。1924年に満鉄が招いた胡適は、中華民国の中心地、北京からの啓蒙家兼旅行者として、大連中華青年会

主催の講演において東北中国人（なお弁髪や纏足を履行する一部の人間）の時間＝差を批判してもいた。しかし中華民国の周縁＝日本植民地に厳に立つ者としての傅立魚にとっては、日本側に日々対抗するためには批判よりも、改革と育成が急務だったと言える。時間＝差をいかに取りもどすか。この課題式は彼の言論と行動のアナロジーとしてある。

ところで、東北で中国語による「成熟した文学」を体現したと言える「満洲国」期の作家たちは、このような時間＝差を取りもどす活動形態はとっていない。なぜなら「新興国家」のもとに中華民国とはあまりに隔絶してしまうからである。では、彼らとそのテキストはこの種の時間＝差にどのようなスタンスを持ったのか、これはまた別に検討されるべきテーマだろう。

## 6 植民地空間がもつ「縦」と「横」を植民地批判の視点に 変遷と交通

先にも言及したが、1928年の帝国日本「内地」の「三・一五事件」に時を同じくして、「関東州」大連における中国人の労働運動・地下活動への取り締まりは厳しくなる。関東軍による張作霖の爆殺から張学良の中華民国への帰順という流れは、「関東州」における植民地政策をも緊張させることになる。この流れのなかで傅立魚も中華民国アイデンティティーからの政治的な行動が目立ち、ついに大連を強制退去になってしまう（検束された当初は死刑判決を受けたとも言われている）。13年の亡命から28年の強制退去までにあった、植民地の二つの意味とそのあいだの時間＝差（歴史性）との前に、いち早く見参したのが傅立魚であっただろう。今後さらにその『泰東日報』社説を通して、この植民地における微細な変遷を問うていきたい。

小論は、近代日本植民地の中間期に可能であった傅立魚の批判精神にあふれた思想と言語の一端を垣間見た。そのような東北植民地の中国側の知の「起源」を「縦」とするならば、さらに、植民地どうしが持つ「横」の視線も欠かせないだろう。この時期の『泰東日報』には、他の日本植民地とくに朝鮮における三一独立運動にかんする小さな記事が少ないが現れる。くり返すが、中国の五四反帝国主義運動は三月の朝鮮の運動にも刺激されたのであってみれば、黄海ゾーンをもってつながる隣どうしの植民地、遼東半島にいる傅立魚は朝鮮半島の人々の動きをどのように見つめたのか。植民地をめぐる思考と言語をつむいでいく過程において、彼は朝鮮の動向から刺激を受けたかどうか。これは、双方の現地人の側どうしの囚らざるネットワークとして、大切な視点になるはずである。

今のところ、三一独立運動を扱った『泰東日報』の社説は見つけていないが、例えば1919年3月15日付の「時事要聞」ページに以下のような記事がある。

### 朝鮮事情 續聞

東京九日訊 高麗亂事業經平服 亦不再行緝補自表面觀之現已恢復原度平靜無事 然可信該半島之獨立自治舉動根深蒂固不易消除 按某禁止播傳之通告 其文詞無甚猛烈 但表示其為極有才學之人所著 又據憲兵隊報告 教會對於煽惑之舉 頗有關係

(中略)

又電云：日本總理原氏現注重於日本屬地政治改良 實有可信之理由 高麗總督之職現只限以陸海軍官補充 然據人推測 文官不久亦可被選 但軍人反對甚力 內閣不易實行其改革 想以現任陸軍部大臣田中將軍之大度必易於進行 高麗臺灣與關東 想不久將以文官為總督云云 (後略)

## 【日誌】

東京九日入電 朝鮮の騒乱事件は鎮静を迎えている。また逮捕者も更にはなく、表面上はすでにもとの平常無事の状態を回復したかに見える。しかしこの半島の独立と自治を求める挙動は根が深く強固であり、排除しがたいものがあるのは確かである。広範囲の呼びかけを禁じたさる通告によると、呼びかけの言葉はそれほど激越ではないが、それが学識ある人間によって書かれていることが判断されるという。また憲兵隊の報告によると、教会が扇動活動と大に関わっているとのことである。

(中略)

さらなる入電によると：日本の総理大臣、原敬氏が日本租借地の政治改良を現在重視しているという。これは信じる理由が大いにある。朝鮮総督には陸海軍の軍官のみをもって当てるのが現行である。しかし推測されるのは、近い将来、文官から選んでもよいことになるとしたら、軍人の反対が強く、内閣がこの改革を実行するのは容易ではないだろうということだ。現職の陸軍大臣、田中義一将軍の寛大な度量があれば、必ずや改革は容易となろう。朝鮮・台湾・関東州はまもなく文官による総督が実現するだろう、などなど(後略)】

「帝都」からの入電をそのまま直訳した記事であるがゆえに、帝国日本の専門用語としての概念「乱事」、「乱徒」など問題あるワードが多い。この中国語には、傅立魚の社説のなかの日本語語彙(様式の地平の目的)とは異なって、意味の地平の目的からの「日本語接触」プロトタイプがある。植民地という空間に典型的なそのような日本語文法が通わされたのには、『泰東日報』の経営が日本人によるということもある。そのような文法を手に「事実」や「客観」であるかのように装う当時の時事ページの内容は、相当注意する必要があるのは言を待たない。帝国日本の領土拡張の版図に覆われた場所に生きる他者の姿は、帝国日本の側の力をもってしては見えてこない。傅立魚らの社説を観察しなければならぬ最大の意味もそこにある。

この「朝鮮事情」の「報道」が言うのは、朝鮮(原文では“高麗”)・台湾・「関東州」の総督府・都督府がそれぞれ官制を改定し、文官が総督・都督(長官)になるような新たな帝国の統治「方策」が組上に載せられていること、それに帝国軍人が反発するだろうことなどである。これは三つの植民地空間を、帝国の力としての日本語文法が一瞬にして「横」につないで見せたくだりである。

そのような「横」ではなく、地理的には離れていても植民地にされてしまった側の人間どうしによる「横」の視線。彼・彼女らが海をこえて互いに交わす視線の交流。それに目を向けるとき、実態としての植民地がさらに立ち現れる。この意味でも、傅立魚をはじめとする大連中国人による言説空間のなかの「横断」について探査が求められる。

## 注

- 1) 拙論「日本植民地の近代メディアはどうはたらいたか——1925年、「関東州」にラジオが生まれた」、共著『戦争の時代と社会——日露戦争と現代』(安田浩・趙景達編)、青木書店、2005年
- 2) 傅立魚の年譜
  - 1882年 安徽省の英山県(今は湖北省に属す)西河集に生まれる。字は新徳、号は西河。
  - 1899年 秀才の資格を得る。庚子事変で(戊戌政変で:大連新本)科学学堂が廃止となり、安徽法政大学堂に学ぶ。
  - 1904年 官費留学生として日本に留学し、明治大学分校(明治大学で法政を専攻:大連新本)を卒業。こ

のとき「民族資産階級による民主革命思想」にふれ、孫文が設立した中国革命同盟会に入る。また湖北革命党のメンバー、田桐、居正、白逾恒と接触。汪精衛、張継、邵力子、陳独秀たちともこの留日時期に交流する。

帰国し、安徽省視学官に任ぜられる。

1911年 武昌起義のときに、安徽省や江蘇省などで革命軍事行動に参加。南京臨時政府が成立すると、外交部参事を任ぜられる。

1912年 天津で『新春秋報』を創刊。

1913年 上記の新聞に袁世凱の帝政運動を攻撃する言論を発表したため追われる身となる。

8月、大連に亡命。

倉谷箕蔵の紹介で、中国語新聞『泰東日報』社の二階の社長室に、金子雪斎（金子平吉、社長）を訪ねる。その後、『泰東日報』の編輯長として招かれたが、言語明朗・博識・流麗な日本語を買われたためであった。

1915年 南方で反袁護国戦争が勃発すると、傅立魚は山東に赴き、居正や呉大洲らと東北軍を組織して討袁武装闘争を発動。このとき金子は約束三条のとおり、自由に行動させ、かつ資金面の援助もした。袁世凱が帝政に失敗し、死亡すると、傅立魚は毅然として北京から大連に戻り、金子を喜ばせ、さらに手厚く待遇された。

1916年 中華革命党が東北で起こした反袁武装闘争に参加。袁世凱の死後、一時は北京国会議員に選ばれるも、報道の仕事に力を尽くす。

『泰東日報』に「六ヶ月間のレーニン」や「ハンガリー労働政府の状況経過」などの文章を発表する。

1920年 7月1日、大衆による東北地方で最初の愛国進歩団体「大連中華青年会」を創立。この日の創立大会ではまず「中華民国国歌」が演奏され、中日の官界・商業界の名士100人あまり、会員400人あまりが参加し、大連港始まって以来初めてこの国歌が大連人の耳に響いた。

1921年 5月、大連地区報道関係者の代表として北京に赴き、「全国報界同仁聯誼会」に参加。同7月、大連で雑誌『新文化』を創刊。

1925年 五・三〇虐殺事件の発生後、「大連滬変救援会」会長に推される。

1926年 7月、青年会創立6周年を記念した文章で、これまでの自身と同人の奮闘と悪戦苦闘を回想し、「環境を利用するも、環境に束縛されず、いつも戦い励んで勇猛に前進し、最終の目的を達成する」と誓う。

1927年以後 社会的影響を利用して中国共産党の人士を擁護、支援していく。ソ連に向う途中で大連に立ち寄った瞿秋白や蔡和森などの人を接待した。

蒋介石・汪精衛が前後して（国共合作を破って）反共転じてからは、大連の植民地統治者も共産党と革命的大衆への締め付けを強くし、傅立魚も支配者の嚴重な監視を受けるようになる。

1928年 南京政府から東北に派遣され張学良の易幟を説いてまわっていた者が大連に寄ったとき、傅立魚に500元の金銭を借りた。日本植民地当局はこれを理由に「中国人が関東州内で政治活動をするのは違法」だとする。傅がこれまでに日本人側の買収を受けず、かつ漢奸になるのを拒んできたこともあって、これを好機と日本側は7月22日、「東三省攪乱を目的として張学良易幟を擁護し、政治的秘結社を組織、種種の陰謀を画策した」という罪名で傅立魚を逮捕した。死刑判決を受けるが、7月29日、日本当局は国内各方面の圧力に迫られ、裁判を経ずに傅を強制退去に処する。

8月17日、傅は船で大連を離れ青島を経て上海へ行き、故郷の安徽省英山へ帰った。

1929年 天津で羅隆基の後任として『益世報』の主編となる。同年夏、北京で『新中華報』を創刊して反日宣伝を進める。

1931年「満洲事変」前後、天津『大公報』に招かれて胡政之を助けて、経営管理の仕事に従事。東北義勇軍を支援する義捐金を集める活動を何度も行う。

1937年 抗日戦争勃発後は、心臓病のために天津に隠居する。

1939年 純文学芸術期刊『新文苑』（第一卷二期、上海、文理図書有限公司発行、新文苑月刊社編輯、発行人：傅立魚）があるというが、論者は未見。

1945年 初、脳溢血のため63歳で死去。

※以上の年譜作成において参考としたのは、『民国人物大辞典』（河北人民出版社、1991年）、『長夜・曙光—殖民統治時期大連の文化芸術—』（大連出版社、1999年）、『日本殖民統治大連四十年史』下冊（社会科学文献出版社、2008年）など。

- 3) 傅立魚「嗚呼金子雪齋」（『青年翼』第3巻10号、1926年10月）にあるエピソードと言うが、未見。論者は黎生・藍昇「傅立魚和〈泰東日報〉」（前掲『長夜・曙光』所収）を参考にした。
- 4) ただし、論者が依拠した『泰東日報』マイクロフィルムには、同年の5月分と7月分が欠落している。
- 5) 高紅梅「大連における傅立魚——ナショナリズムと植民地のはざままで」（『言語・地域文化研究』第11号、東京外国語大学大学院、2005年）における思想や活動の概観のほかは、傅立魚やこの時期の大連の中国知識人の言論にかんする研究は現代日本では見当たらない。また現代中国では、前掲『長夜・曙光』、『日本殖民統治大連四十年史』、「文化大連」叢書（大連出版社、2007年）などが、大連の近代文化を見直す流れのなかで傅立魚や中華青年会について少しずつ言及し始めているが、どれも画一的な紹介にとどまっている。
- 6) 周棉主編『中国留学生大辞典』、南京大学出版社、1999年8月

※本稿は2009年9月に韓国で開催された国際シンポジウム「植民地主義と文学」（韓国民族文学研究所主催）における発表原稿をさらに発展させたものである。

（千葉大学准教授）